

能楽「鉄輪」における「うらみ」の構造とメカニズム

—主人公の心理分析を通してうらみと呪詛報復の因果を探る—

齋藤澄子

はじめに

人間の持つ感情の中で「うらみ」は対人関係によって生ずる心の作用である。一般的には特定の人物に対する憎しみが主な要因となるが、それは平常ではさらけ出せない、いわば心の暗部に置かれている性質のものである。喜びや悲しさなどたやすく表情や行為にあらわれる感情とは異なり、陰に秘めてはいるが非常に強い思いが消えずにわだかまっているのが「うらみ」の特性である。心にとつては大変なストレスとなる「うらみ」には様々な形態と程度のものが認められるが、その解消法も千差万別である。古来よりこうした「うらみ」を解消する物語や劇には事欠かないのも事実であるし、古今に問わず人間にとつては普遍的な心の作用であり、その対処の仕方については共感を呼ぶものであることは自明であろう。具体的な解消法としては、「うらみを晴らす」という俗的な願望と実践行為が代表的手段となるが、能の世界では「鉄輪」^①がそうした題材を取り上げた筆頭に挙げられ、今日でも人気曲として上演されている。本稿ではこの「鉄輪」の主人公に焦点を当て「うらみ」の構造を分析するとともに、それを解消するに至るプロセスを辿りながら、「うらみ」のメカニズムを説明するこ

とを主眼とするものである。

一 「鉄輪」における登場人物と場面設定

「鉄輪」における登場人物や場面の設定は、女の呪詛説話として名高い「宇治の橋姫」^②を本説^③に、さらには生霊となった前妻に殺されそうになった男を陰陽師が救う話^④などを掛け合わせて作ったものと思われる。

まず前場では貴船神社^⑤が大きな役割を担っている。貴船神社は本来縁結びの神として知られるが、他方で縁切りの神や呪詛神としての信仰もあり、「丑の刻参り」^⑥で有名になった起源的な霊地としても著名である。現代にまで伝わる「丑の刻参り」が、女が呪詛するために行われるお参り^⑦として定着したのは「宇治の橋姫」によるところが大きい。「鉄輪」はこの「宇治の橋姫」を本説とした主人公（シテ）を登場させ、さらに所縁の深い貴船神社を前場の舞台に設定することによって、リアリティのある迫真的な場面を作り出しているのである。

後場では安倍清明（ワキ）^⑧が登場する。清明は説話「宇治の橋姫」の後半にも出てくるが、橋姫との直接の対決は行っていない。「今昔

物語一以来の説話に登場する陰陽師の活躍がそのまま、陰陽師として名高いいわばスーパーパースタース的存在の安倍清明に直結し、登場させることによって、シテのステイタスが高まるのみならず、作品全体のパワーバランス（前場の貴船神社に対する後場の安倍清明）が拮抗して保たれることになっている。

不実な夫に対するうらみから復讐を祈願して「丑の刻参り」をし、ついには神託を受け鬼女となって復讐を遂げようとする主人公の鬼気迫る姿は、「宇治の橋姫」の鬼女の描写をモデルにしてほぼ再現が成されている。それに対して安倍清明がかううじて、生霊となった鬼女の復讐を阻むにとどまるのが「鉄輪」における両者の構図である。見方を変えれば、あの清明ですら女の呪詛を完全に消し去ることは出来なかった。それほどに主人公のうらみの凄まじさが際立ってくることになる。



(写真1 本宮への参道。水害を避け山側に登ったところに建てられている)



(写真2 本宮の社殿。2007年に改築された)



(写真3 安倍清明の住居跡に建てられたといわれる清明神社の鳥居)



(写真4 清明神社の社殿)

二 「鉄輪」の構成と概要

登場人物は以下の通り。

前シテ 丑の刻参りの女

後シテ 鬼女（女の生霊）

ワキ 安倍清明

ワキツレ 女の前夫

アイ 貴船神社の下級の神官

「鉄輪」の構成は以下の十の段落に区分される。^④

- 一、名ノリ（アイの独白）
アイの登場から次第の前まで
- 二、シテの登場（夫を呪詛する心情吐露と貴船神社への道行）
次第からサシ、下げ歌、上げ歌、着きゼリフまで
- 三、アイとシテの応対（アイが祈願成就のお告げを伝える）
問答
- 四、シテの中入り（鬼に変貌しつつ帰宅）
シテ「これは不思議の御告か」から地謡の上ゲ歌を経て中入りまで
- 五、ワキツレの登場（身の異変を陰陽師に伝える）
ワキツレによる名ノリ
- 六、ワキツレとワキによる問答（寿命の危機を告げる清明に夫が祈禱を懇願する）
ワキツレ「いかに案内申し候」からワキツレ「畏まつて候」まで
- 七、ワキの待受け（清明は祭壇を設け、形代を供え祈禱する）
「ノット」から地謡（ノリ地）の「身の毛よだちて、恐ろしや」まで
- 八、後シテの登場（頭に鉄輪を付けたシテが現れうらみを述べ夫の形代に迫る）
「出端」からサシ、一セイ、ノリ地「いかに殿御よ、めずらしや」まで
- 九、シテの嘆き（うらみに至った心境を語り夫に迫る）
シテのクドキからノリ地「命は今宵ぞ、いたはしや」まで
- 十、シテの立働（形代に後妻打ちした後夫に迫るが守護神に阻まれ退散する）
中ノリ地「悪しかれと」より最後まで

以上が各段の概略と全体の流れであるが、このうち主人公の心情が描かれている前場の二段目から四段目、後場の八段目から最後まででの解析をしていくことにする。

三 前場における主人公の心理の流れ

前場では、「丑の刻参り」をするに至ったいきさつを語り貴船神社へお参りする道行（第二段）、貴船神社に着いて神託を告げられた後の問答（第三段）、そして鬼女への変貌（第四段）と、主人公の劇的な心境のプロセスを辿ることが出来る。

夫を呪詛するシテの心情吐露と貴船神社への道行（第二段）

夢のお告げを受けた貴船神社の神官（アイ）が、真夜中に都より呪詛のために参詣している女に、夢のお告げを申し上げる旨を述べる（第一段）と、「次第」の囃子にのって女（シテ）が登場し、いきなり心中を吐露し始める（第二段）。

「次第」

シテ 日も数そひて恋衣、貴船の宮に参らん。

「日数がたてばたつほど別れた夫への恋心がつるので貴船神社にお参りしましょう」と、「丑の刻参り」をする所以を語り始める。

「サシ」では「げにや蜘蛛の糸にあれたる駒は繫ぐとも、二道かくる徒人を、頼まじ」（蜘蛛の巣に荒れる馬を繫ぐことが出来ても、二

股をかける浮気男の心を引き留めることなど出来ぬのだから」という古歌になぞらえながら、不実の夫の嘘を見抜けず契りを交わした悔しさもみな自分のせいなのだと言ひ。夫に非があることは明らかだが、騙されていたとはいえ、それを信じた自分にも責任があることを認めざるをえない。浮気心は男につき物だが、自分の夫に限っては信じていた、その裏切りに失望しながらも未だ諦めきれぬ自分がいる。そうした後悔と自責と未練に葛藤しながら悶々とした心の状態にあるのは、現代人においてもごく普通の有り方である。大抵は時間の経過と共に葛藤は薄れていき、原因となっている夫を早く忘れてしまおうという苦しさを回避する自浄作用が働く。けれども人によつてはそうした苦悩や葛藤に耐え切れず、なぜ自分がこうまで苦しまなければいけないのか、非がある夫はぬくぬくと平気な顔をしているのは不平等であるし、理不尽なことだ、と被害者意識を募らせてさらに苦悩を深めていく場合もある。「サシ」の後半ではそうした苦悩に耐え切れぬ状況を脱するためのひとつの決意が語られる。

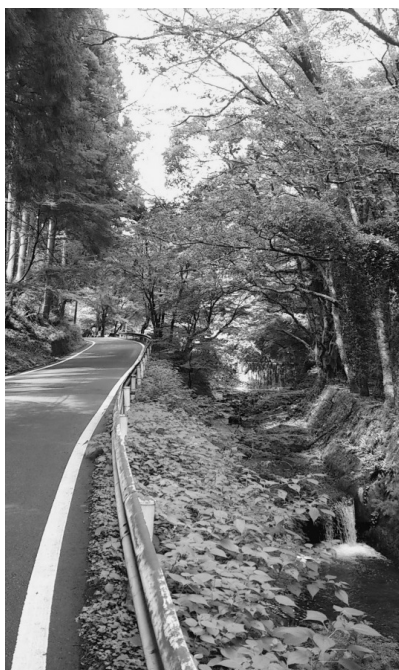
「あまり思ふも苦しさに、貴船の宮に詣でつつ、住むかひもなき同じ世の、中に報いを見せ給へ」（悩み苦しみのあまりに、貴船神社にお参りし、もはや生きる甲斐もないこの世であるが、どうせならわたしの生きていくうちに、報いを与えていただきたい）、と主人公は報復の願かけを表明する。現実的に不実な夫に報復することが出来るかどうかは分からないが、少なくとも貴船神社を頼つて通うことによつて苦悩を解消する何らかの解決策を期待し、実践的な行動に移っている。人間にとつてこうした代償行動はよく見られる。現代でも神社やお寺に参拝して祈願したり願をかけたたりする極めて身近な風習もそのひとつだが、当時としては神仏にすがることが最大のこころの拠り所であつたことは想像に難くない。主人公はしかし究極の決断をしてい

る。呪詛のための「丑の刻参り」からもわかるように、鬼となつて対象相手を取り殺すことを最終目的としている。報復には様々な仕方があろうが、人を殺めることで目的を遂げることはいわば捨て身の行為であり、現世では凶悪な犯罪者として、また死んでから地獄で自ら報いを受けることも厭わないという覚悟が出来ているということに他ならない。ここで冷静に考えてみれば、裏切り行為を行った不実な夫と相手の女がその代償として殺されてしまうというのは、いささか罰が重過ぎる。命の代償をもって罪を償わせる決断は平常心を欠いた異常な判断と言わねばならない。つまりシテは「丑の刻参り」をする決断をした時点ですでに、正常な判断能力を逸脱した異常な精神状態に陥っているとみられる。苦悩や葛藤に苛まれ、精神的に追い込まれてこの状態からなんとか脱したいという想いが次第に「うらみ」に集約凝集されていく心境の推移は、続く「上ヶ歌」において明解に描かれているのでみていこう。

「上ヶ歌」

シテ 通ひ馴れたる道の末、夜も糺すの交らぬは、思ひに沈む御菩薩池、生けるかひなき憂き身の。消えん程とや草深き、市原野辺の露分けて、月遅き夜の鞍馬川、橋を過ぐれば程もなく、貴船の宮に着きにけり。

「幾夜も通ひ馴れたこの道の先は、ただすのかわら河原、夜も変わらず平気なのは、嘆きに沈む身だからで、御菩薩池を通ると生きていく甲斐もない憂き身を沈めてしまひそうになる。はかなく消えてしまふわが身のような露を置く草深い市原野を踏み分け、月の出が遅い真つ暗な夜の鞍



(写真6 貴船神社に向かう山道)



(写真5 貴船川の川筋沿いにある堂岩という名所。和泉式部が貴船神社に参詣した折に詠んだ歌に由来する)

馬川の橋を渡ると、やがて貴船の宮に着きました。」



(写真8 奥宮へ向かう参道)



(写真7 本宮から奥宮へ向かう山道。夏には川沿いに川床が立てられ料理がふるまわれる。涼を求める人々の夏の風物詩として人気が高い)

ここでは京の都から貴船神社までの道行に主人公の心境が巧みに読み込まれている。現在の京都の下京区あたりから貴船神社への道のりはおよそ十五キロメートル。下賀茂神社付近に広がる糺河原あたりからは当時はひどい野原や山道が続いていたと思われる。そこをとぼとぼと歩いて暗い夜道を一人で行くのは並大抵のことではない。成人女性でしかも昔の衣装と履物で歩くことを考えると、五〜六時間はかかるはずである。夜の八時ころ出発して真夜中の午前二時ころに貴船に到着し、祈願の後また同じ道を引き返す。それを毎日続ける主人公は異常な精神状態にあると言わねばならない。通い馴れた道とはいえ夜歩くのは避けたい。糺河原でも昼歩くのと同じように平気で通れるのは、もはや恐怖心をも凌ぐほどの沈んだ精神状態にあるからで、それは主人公も自覚している。外的な刺激による怯えや恐怖心も苦悩の重さや深さによっては無反応になってしまふ。さらに北上した御菩薩池では生き甲斐もないわが身が辛過ぎて、池に飛び込み沈んでしまいたくなる衝動に駆られる。もはやすぐに死に絶えてしまいたい状況まで追い込まれている自分を市原野辺の草露に見立ててしまふ。川沿いの山道が続き鞍馬川を渡ると貴船神社への一本道となるが、日中でも人がいなければ一人で歩くのは心細いのに、ましてや月の出の遅い闇夜では物理的な歩行さえもままならぬはずだ。そうした物理的にも精神的にも困難な参詣を続けることよって祈願が成就できると信じている。呪詛を支えにそれを目的化することよって無意識のうちに生き延びる解決策を見出したのである。うらみという負の力が生きる原動力として主人公の生活行動すべてを支配している状況にある。



(写真9 奥宮は本宮より貴船川沿い700m上流に位置する)



(写真10 奥宮の本社殿)

祈願成就のお告げを聞いたシテの反応と心情(第三段)

第三段ではまず神官よって明神の夢のお告げが伝えられる。「あなたは都から丑の刻参りをなさるおかたですか?今夜あなたの身の上にお告げがあつて、願いは叶えてさしあげようということですよ。鬼になりたいとの願いでしたから、自宅へお帰りになつて赤い衣を身に付け、顔には赤い顔料を塗り、頭には鉄輪を乗せ、その三脚に火を灯し、憤怒の心を持って鬼神に成れましよう、とのお告げです。急いでお帰りになつて、お告げのようになされませ。」

これに対して主人公は「これは思つてもみないお言葉です。私のことではなく人違いでしょう。」と言つて白を切る。「丑の刻参り」は人に見られると願いが叶わないという俗説があり、それを危惧しての返

答とも取れるし、他の人を介してお告げが下され告げられるという俄かには信じ難いお告げのあり方に躊躇したのかもしれない。かといって「丑の刻参り」をしている女はこの主人公しかおらず、神官は確信して間違ひなくあなたのことであると説明しているうちに、主人公が恐ろしい様相に変わってきたなどと言ひ、恐怖心に駆られ「恐ろしや、恐ろしや」と言つて退場してしまふ。主人公が現実に対人關係を持つのはこのシーンのみである。うらみに駆られ「丑の刻参り」をする主人公は深く心を閉ざした状況にあり、人との對話も無く一心に呪詛することに集中していた主人公の姿は、人を寄せ付けない文字通り鬼氣迫る氣配を醸し出していたことは容易に想像できる。いわば狂氣の沙汰である。しかしながら意識はまだ人としての判断能力を失つてはならず、神官とのコミュニケーションが成り立っていることから、この時点では未だ人間的な苦悩や葛藤を捨てきれずにいることが見て取れるのである。

鬼に変貌していくわが身と覚悟（第四段）

シテ これは不思議な御告かな、まづまづ我が家に帰らつ、夢想のごとくなるべしと

主人公は、神官によって下された夢のお告げに半信半疑だったものの家に帰つてお告げの通りの姿にならうと決めた瞬間、「たちまち顔色が変わり、様子も変わつて、今まで美しい女の容貌であったのに、艶やかな黒髪は逆立ち、黒雲が立ち覆ひ、雨が降り、風が吹き、雷鳴も轟わたり」（「上ヶ歌」）

地謡 思ふ仲をば離けられし、恨みの鬼となつて、

人に思ひ知らせん、憂き人に思ひ知らせん

「雷神でも」裂くことの出来ぬ夫婦の仲を引き裂かれたうらみに、鬼となつてあの薄情男に思い知らせてやるう」と、神託が下りたのを契機に鬼となることを決意する。「丑の刻参り」をしている間は、夫への未練を断ち切れず苦悩していたが、祈願が叶いお告げによって鬼になることが許された、いわば「神託という大義名分による復讐の正当性」が思いを遂げる実行へと促す強力な推進力になったことになる。たとえ非現実的な事象でも人は都合の良いように拡大解釈をして自らを正当化する傾向にあるが、切羽詰まり極限状態にまで精神が追い込まれている場合には、どんな些細なことであれそれが頼みの綱となる可能性がある。それが本人にとつて予想していなかつた意外なものであつたり、些細な出来事であつたり、ふとして気がついた日常的な物事であつたり、何が作用するかわからないことがひとつの「きっかけ」となつて作用をもたらすことが多々ある。無論、精神的な鬱状態にある人にとつては症状が好転する手がかりとなる重要な要素になる。この女の場合にはそれがマイナス方向へと推し進んでいるところが異常である。それは人間の持つ凶暴性やタブーとされる絶対悪への憧れといった心の深層に潜む性質を掘り起こすものでもある。見方を変えれば、平常と非常、愛情と非情、善と悪、良心と邪心、服従と反抗など人の心にある相反する心理や意識が表裏一体であることを指し示していることに他ならない。女はこの神託により鬼になる決意をすることによって、結果的に未練を断ち切ることができ、苦悩や葛藤の苦しみから解放されることになるのである。

四 後場における主人公の心理の流れ

後場ではまず女の前夫（ワキツレ）が登場し、夢見が悪いので安倍清明のところへ夢占いをしてもらいに参ることを述べる（第五段）。清明（ワキ）は占うまでもなく男が女のうらみで今夜のうちに命も危なく、もはや自分の力ではどうにもならぬことを告げる。男の必至の願いに応じ、清明もなんとかして命を形代かたしろに転じ替えて救うことを男に約束する（第六段）。舞台正面に一畳台と高棚の祈禱の作り物が置かれ、棚の上には男女の形代かたしろが置かれ、囃子が始まると清明は一畳台に上がり祈禱を始める（第七段）。



（写真11 清明神社境内に置かれた安倍清明の坐像）



（写真12 厄除桃の碑。陰陽五行のシンボルとして清明は五芒星の紋を用いた。桔梗の花を図案化した桔梗紋の変形であるこの紋を「清明桔梗」とも言う）

鬼女（後シテ）が現れ「うらみ」を述べ

夫の形代に迫る（第八段）

「出端」の囃子で鬼女（シテ）が登場する。火を灯した鉄輪（五徳）¹⁶を頭に載せ、打ち杖を持ち、一の松に立ち謡う。

〔サン〕

シテ それ花は斜脚の暖風に開けて、同じく暮春の風に散り、月は東山より出でて早く西巖に隠れぬ、世上の無常かくのごとし、因果は車輪の巡るがごとく、われに憂かりし人びとに、たちまち報ひを見すべきなり

「花は斜めに振る春の小雨や暖かに吹かれて開くが、晩春の風で散ってしまう。また都の月は東山から出てすぐに西の峰に隠れてしまふ。こんな風に無常なのがこの世です。因果は車輪が回るように巡ってきます。わたしに辛い思いをさせた人々にいますすぐその報いを見せやろうと思います。」

鬼女となって現れた女は、因果応報の摂理を盾に、自分に辛い思いをさせた人には当然の報いが来るのだと威勢よく口上を述べる。そこにはもはや未練はなく非情な決意が感じられる。鬼になったという自覚の表明でもあるが、鬼とは神の神託によって引き起こされた身の変化であって、女自身ではなく、神様が手を下しているのだという一種の責任転嫁がその背景にある。自らが殺意をもって相手を殺めるのであれば当然自分が責任を負わねばならないが、神様の代理行動によって「天罰を下す」というすり替えられた論理によれば女の行為は正当化される。自分がやったのではなく鬼（神）がやったのだ、という非

論理的、非現実的な自己保身的言い訳と判断されてしまっても仕方がない。また現代においては心神耗弱によって分別がつかない心理状況にあるとか、即、精神鑑定の必要性を要求されることにもなるだろう。さらにこの鬼女は生霊であるから、現実的に女本人が現れて人を殺めたことにはならない。すべて生霊がやったことだから、本人には罪の追及が及ばないというわけである。つまり鬼女となって現れているのは「うらみが怒りに転化した究極のかたち」と言っても過言ではない。ただひたすらにうらみの対象である夫とその相手の女を取り殺すことだけに意識が集中している。まさに女は物に取り憑かれた状況にある。

鬼女はさらに続けて（「一セイ」、「ノリ地」）、恋に責められて賀茂川に沈んでしまった人は青い鬼となったが、このわたしは貴船川の川瀬の螢火のように頭に頂いた鉄輪の足に火を灯し、その炎のような赤い鬼となって、

地謡 臥したる男の、枕に寄り添ひ、いかに殿御よ、めづらしや

「寝ている男の枕元に寄り添い、ねえあなた、お久しぶりなこと。」と女は夫に迫っていく。共に生活を営んだ夫への未練もはやはない。鬼と化した女は冷酷非情な目的意識のみで行動している。その根源にあるのは夫へのうらみであり、そこへ至るまでの苦しい状況が次の段で赤裸々に語られるのである。

「うらみ」に至った未練や苦悩を語り夫に迫る（第九段）

「クドキ」の冒頭、「恨めしや」でいきなり始まるのは何を置いても先に来る気持ちを抑えきれなかったからである。どんな理由があれ

「恨めしい」気持ちは変えることが出来ないし、そういう気持ちにさせた夫は絶対に許せない。また夫へのうらみから呪詛をし、報復するために鬼女になってしまった彼女自身を憂いる気持ちもある。こんな自分にしてしまった取り返しのない状況にいる自分への怒りと悲哀もあるだろう。「永遠の愛を誓ったのにどうして私を捨ててしまったのか？ ああ恨めしい。」と、次第にうらみに至るありさまを嘆き始める。

「ノリ地」

シテ 捨てられて

地謡 捨てられて、思うふ思ひの、涙に沈み、人を恨み

シテ 夫を啣くはち

地謡 或時は恋しく

シテ 又は恨めしく

地謡 起きても寝ても、忘れぬ思ひの、因果は今ぞと、

白雪の消えなん、命は今宵ぞ、いたはしや

「捨てられて、悲しく悔しい涙に沈み、相手の女を恨み、夫をなじり、ある時は夫が恋しく、またある時は恨めしく、寝ても覚めても忘れることが出来ない。そんな思いをさせた報いを今こそ知るがいい。あなたの命が白雪のように消えるのは今宵限り。お気の毒さま。」

苦悶の日々を送ってきた女の心中は、誰しもが体験したことのある内容である。とりたてて異常さは認められないし、極めてノーマルな心の作用とプロセスを経てきたといえる。従って主人公の気持ちに対する理解と共感、多少にかかわらず我がことのように思えるはずである。しかしながら主人公は苦悩に耐え切れず必死の思いで呪詛する

ことに絶することしかできなかつた。呪詛するといふ非現実的、非理性的な意識と行為に陥ることにととう嵌まり込んでいく。人によってはそうした状況に陥りやすい性質を持つてゐるのはありえるし、そうでない人でもこうした誘惑や懸念を抱くことまあることだろう。この主人公の場合呪詛するところまで追い込まれ、ついには理性的抑制の籠を外すしかなかつたと思われる。呪詛が叶い鬼となつてからは夫にはもはや未練はなく、非情な決意と心境で夫と相手の女を取り殺すことが出来る。こうしたうらみによる報復行為は日常的、現実的には成し遂げることがなかなか難しいことを一般には認識されている。だからこそ主人公の報復には痛快な達成感を感じるのである。うらみには普段は蓋をされている邪悪な欲求や願望を促す反作用的な力がある。良識ある判断や行動を求められそれを良しとする社会生活に対して、理性や常識に縛られずストレートに自らの意識や思いを表したいという本能的な欲求を誰しもが抱いてゐる。ただその欲求や願望を現実的に行うことは希である。

鬼になつたことで主人公のうらみが果たせることになり、ほぼ確実に報復行為は成就されるという確信があるため、主人公の言葉にも「いたはしや」といふ相手を憐れ蔑む皮肉な言葉が発せられるのである。

鬼女の報復と退散（第十段）

第十段では報復のシーンが描かれている。報復に臨む主人公の心理が生々しく吐露される臨場感に溢れた部分である。

「互いに良かれと思つてゐる間柄でも嘆きは生まれるものだ。という歌にもあるように、長年辛い思いに沈んできた恨みが積もつたせいで、私が執心の鬼となるのも当然のことでしょう。さあ命を取つてやりましょう。」と言つて、打ち杖を振り上げまず相手の女（形代）の

髪を手を巻きつけて打ち据える。

地謡 夢現とも分かざる憂き世に、因果は巡り合ひたり、

今更さこそ悔しかるらめ、さて懲りや思ひ知れ

「夢か現かわからないようなこの憂き世にも（お前が生まれ変わらぬうちに私の夫を奪つた）因果が巡つてきて報復を受けるようになった。今になってはさぞ後悔してゐるだろうよ。さあ懲りたか、思い知るがいい。」

まず相手の女に報復の手が及んだのは、先に程度の軽いものから片づける優先順位からだろう。一番のうらみの元凶は夫にあり、その相手である女も同罪ながら夫へのうらみはそれ以上に深く強いことを示している。女を葬り去つた後で、じっくりと夫を取り殺す。美味しいものや一番楽しみにしてゐたことは後にとつておくといふ欲求にも似てゐるのではあるまいか。主人公の気持ちにはもはや相手に対する憐みや悲しみを超越した冷酷非情なまでの意識で臨んでおり、同情心など微塵もない状況にある。それが鬼というものだろう。人間であれば相手の憐みや同情心から、報復に一瞬躊躇するとか悲哀を感じてしまふものであるが、鬼となつた主人公にはそうした心配が全く見えないからだ。

さらに主人公は「殊更恨めしき」と言つて本命の夫の烏帽子（形代）に近づくものの、清明の祈禱が呼び寄せた守護神の神力によつて責められ、勢いも衰えて撤退せざるを得なくなる。

地謡 時節を待つべしや、まづこの度は帰るべしと、

言ふ声ばかりはさだかに聞こえて、

言ふ声ばかり聞こえて姿は、

目に見えぬ鬼とぞなりにける

「また巡り逢う時を待とう。ひとまず今日のところは帰ってやろう。という声だけが聴こえたかと思うと目に見えぬ鬼となって消えてしまった。」

主人公は報復を途中で断念し退散することになったが、鬼となったいまでは目的が果たされるまで何度でも現れ、報復が成就するまで続けられることを示唆している。鬼となつてうらみを晴らすということに果てしなく非情な実践行為である。うらみは報復が完了するまで消えることなくいずれは夫も殺される運命にあることを暗示して「鉄輪」は終わるのである。うらみによる報復の執念深さは主人公の怒りから来るものだが、これだけの強い怒りは裏を返せばそれだけ男への思いが深く強かつたということで、その根底には救いのない悲しみが広がっている。この能ではそうした主人公の内面的な悲しみも洞察しているから、観能のあとには何か遣り切れない悲しくも切ない余韻が残るのも確かである。

五 鉄輪（五徳）の象徴的な使用方法

「鉄輪」というタイトルも示しているように、主人公が鬼になる重要な役割を果たす道具の一つが鉄輪（五徳）である。通常五徳は火鉢に三脚の足を突き刺してその上の円形の鉄輪に土瓶や鉄瓶、焼き網などをのせてお湯を沸かしたり鍋で調理したり、食材を炙つたりする極めて日常的で家庭的な生活必需品として用いられているものである。古来より五徳はそうした認識のもとに使われているものであるし、現代でも変形はしていても未だに日用品として存在し続けている。「宇治の橋姫」に記述されている鬼になる必要条件には、この五徳を逆にして頭にかぶり三脚の足を松を燃やして火を灯すように要求されてい

る。「鉄輪」の主人公もこの通り実践している訳だが、五徳の本来の使い方とは真逆な誤った使い方をしている訳で、これは何を意味するのか？推測するにおそらくは三脚の足は鬼の角に見立てているのであるし、それに火を灯すのは五徳が火器に関わるものであることの証であると共に、見た目の奇異さや尋常ならざるいわば常軌を逸した風貌を演出することを目的として課されたように思われる。しかも生活の営みには不可欠である家庭用品を、それとは対極にある非人道的な使い方（鬼になるための道具）として利用する皮肉！それが日常的で親しみのある物であればあるほど、その異様な使い方に驚きそしてそうしているひとの精神状態に恐れをなすのである。五徳はそういう意味で、鬼へと変身するための安易な道具のみならず、鬼になるという尋常ならざる人心の象徴として見るべきもののように思う。

六 「鉄輪」と「葵上」の違い

「鉄輪」と同様に後妻打ち¹⁷を題材にした有名な能に「葵上」¹⁸がある。二つの能は相手の男に対するうらみから生霊となつて報復を行うものの陰陽師の活躍によつて、報復は未遂に終わり退散する、という構図は同じである。決定的な違いは、「鉄輪」の場合は夫と相手の女を取り殺そうとするが、「葵上」では相手の女のみを報復の矛先が向けられる点にある。「鉄輪」の主人公は夫へのうらみが強くて鬼女となつたが、「葵上」の主人公である六条御息所は鬼にはならず、生霊となつて葵の前に登場し後妻打ちをして報復する。六条御息所は「丑の刻参り」などはしていないし、鬼になつて報復してやろうという決意もなかっただろう。本人自身生霊となつて葵上に報復していること自体知っていたのが知らなかったのかも不明である。本来ならば不実をした男の方

(光源氏)がもつと憎いはずだが、その矛先が相手の女の方にか向けられていないというのは釈然としない。しかしこれは六条御息所にはまだ光源氏に未練が残っていて、報復できないでいる状態にあるとみるべきように思う。光源氏には振られたけれどもまだまだ未練があり、ましてやうらみで取り殺すような報復する気持にはなれない。そうした苦悩に苛まれ心が揺れ動いている六条御息所は最終的に成仏できず浮遊霊のようになって時を経て現れてくるのである。「鉄輪」の主人公のように、夫への強いうらみから鬼となって最終的には夫と相手の女を取り殺してしまうというのが報復として納得のいく結末ではある。「鉄輪」ではそうした構図が見えている。ただ陰陽師の阻害により達成できなかった不慮の幕切れで、その後の展開がどうなったのか、という思わせぶりな期待感と恐怖感が後味に残る。周知のことではあるが、「葵上」ではその直後に葵上は亡くなることになっている。物語の筋から言えば、六条御息所の怨霊に取り殺されたということになる。「鉄輪」においても清明という強力な陰陽師の神力によって一時は報復の手を逃れたものの、鬼女となった主人公の霊力と執拗な報復の繰り返しによって夫の命が尽きるのは時間の問題と考えられる。同じ「後妻打ち」という題材をモチーフに、ひとの「うらみ」による報復劇もその主人公の心の持ち方によっては結果が随分変わってくる。「鉄輪」の主人公の「うらみ」は底知れず、また鬼となった非情な心理には身震いさせるような恐ろしさを感じさせるものがある。

七 「鉄輪」における「うらみ」の構造とメカニズム

「うらみ」は人と人との対応の中で生まれる憎しみにその発端がある。それはどんな対人関係であっても起こりうる心の現象であるが、

その対象者が非常に親しい、あるいは愛情を注ぎ合い、深い信頼関係で結ばれていた人であればあるほど、「うらみ」はより強くより深いものになる可能性がある。「鉄輪」では永久の愛を誓い合った夫婦の離別によって引き起こされたものだ。お互いに愛想を尽かしてもはや一緒に生活できなくなつて夫婦生活が破綻してしまう離別ではなく、夫が他の女と二股をかけ、一方的に主人公を捨てて他の女と一緒にいった。主人公にとってはまさに青天の霹靂であつたかもしれない。それから主人公の心理状態は悲惨な状況に置かれたことは明らかである。夫との生活や愛情、過去の記憶が裏切りによってすべて偽りのものだったのか、という驚きと困惑、そして自分のそれまでの人生や生き方までも全否定されてしまったような悲しさ、信じていたものが無くなつてしまったあとの虚無感、さらには女として生きていく支えを奪われてしまった喪失感や絶望感など、思い悩めば悩むほど苦悩と葛藤は深刻さを増し、遂には耐え切れない苦境に陥る。夫を恨み、相手の女を恨み、呪詛することによってのみしか生きる目的を見出せなくなつて

いる。それを解消する手段としては何としても呪詛を叶え報復を果たすことしかない。うらみが強くなればなるほど思い込みが激しくなり、見識が狭くなり(人の意見を聞かず、人からどう思われているかが気にしない)、一心不乱に「丑の刻参り」に専念する。こうして「うらみ」は呪詛することに転化され、さらには鬼となつて報復することが、「うらみ」を解消させる最大の方策と考えるようになっていく。

八 「鉄輪」における「うらみ」と

呪詛報復の因果について

「うらみ」を晴らすことは世間一般には非合法な行為による悪いイ

メーヅが付きまとう。しかし当事者にとつては非合法であれ合法であれ、手段を問わず「うらみ」を解消させたい一心で絶つて生きていくしかない。「鉄輪」における呪詛による報復という手段は、非現実的で不確実な方法ではあるが、主人公はこれを拠り所にするしか他に手段がなかった。幸いにも呪詛が叶い神託を得て（神様の後ろ盾を得て）、今度は鬼となつてようやく報復することが出来る。それではこうした一連の代償行動によつてのみしか「うらみ」を解消する手段はなかったのであろうか？「鉄輪」の「うらみ」は、異性間の愛憎という非常に身近でありがちな要因から起きる問題を題材にしている。そこには理屈や常識では割り切れない感情的に「デリケートな要素も絡むだけに、「うらみ」をたやすく解消する方法や手段は困難を極めるのが現実ではなからうか。

逆な見方をすれば、例えば現代でも「うらみを晴らす」ことを主眼にしたテレビドラマが人気を博している。人間心理の隠れた願望や欲求をストリートに表現する内容である。こうしたドラマの人気の背景には、「やられたらやり返す」とか「倍返し」など正当な理由と根拠があればたとえそれが非合法な方法であっても肯定されてしまうというのが、人間感情や人間心理にはあるからだろう。現実的な報復は無理にしても、ヴァーチャルな世界で、フィクションであるからゆえに日頃のうらみや鬱憤を解消してくれるある種の達成感やカタルシスをおぼえさせることは否めない。それこそが「鉄輪」のもつ人気の要因であり、普遍的な人間の心理を読み込んでいる証ともいえるのだ。

まとめ

「鉄輪」における「うらみ」は非常に根深く重いが、その解消法は

実に明解で直截的、しかも非現実的で非常識的な方法にもかかわらず、共感や達成感を覚えさせるものがある。人間の心理の奥深く潜在本能的な欲求や願望を呼び覚ます、何か普遍的な一部の感情が「うらみ」の根源的な生成要素としてあることは明らかである。またその解消法を解く鍵も、「うらみ」の構造を解析し、解消に至るプロセスを辿ることによつて明らかにされてきた。「鉄輪」の主人公は常軌を逸した精神状態にあり、またその報復も極端な代償行動を取っているもの、われわれ見る者にとっては、不快感や矛盾点を感じることなく受け入れることが出来、さらには達成感すら覚えさせてくれる。時空を超えて日本人としての普遍的な意識感情を共有できる「鉄輪」の魅力はそんなところにあるのかもしれない。

注

- (1) 鉄輪（かなわ） 四、五番目物。「貴船」あるいは「木船」とも呼ばれていた。作者は不詳。
- (2) 鎌倉時代に書かれた屋代本『平家物語』「剣之巻」に登場する「宇治の橋姫」という女性が、怨みをはらすため鬼になりたいと願をかけ、貴船神社に「丑の刻参り」を行つて願いを成就させたといわれる。
- (3) 本説（ほんぜつ） 素材典拠が著名なもの。世阿弥は伝書の中で能は本説に基づいて作るべきと記している。
- (4) 『今昔物語集』 卷二十四
- (5) 貴船神社（きふねじんじや） 京都府京都市左京区鞍馬貴船町にある貴船川沿いの神社で、源義経に縁のある鞍馬寺と隣接した立地のため、現在でも人気の周遊コースになっている。水神である高麗神（たかおかみのかみ）を祀り、古くから祈雨の神として

信仰された。創建年代は不詳ながら白鳳六年（六六六年）に社殿造替えの記録がある。十一世紀半ばに出水により社殿が流失し、その後七百m下流に社殿を再建遷座して本宮とし、元の鎮座地は奥宮として今日に至っている（現在では本宮・結社（中宮）・奥宮の三つの社殿が分かれて立っている）。古来より絵馬の発祥として知られ、縁結びの神として信仰をあつめている。他方では丑の刻に貴船明神が降臨したという由緒から、「丑の刻参り」で知られ、縁切りの神、呪咀神としても信仰されたことでも有名になった。

(6) 丑の刻参り（うしのこくまいり）古くは祈願成就のため、丑の刻（午前二時ころ）に神仏に参拝することをいったが、後には呪咀する参詣行為に転ずるようになった。

(7) 安倍清明（あべのせいめい）平安時代の陰陽師（九二一—一〇〇五）。当時最先端の学問であった「天文道」や占いを体系化した陰陽道に長じた陰陽師として朝廷や貴族から信頼を受け、その事跡は神秘化されて数多くの伝説的逸話を生んでいったことで知られる。一条戻橋付近にある清明神社は安倍晴明の屋敷跡に建てられたといわれる。

(8) 「長なる髪をば五つに分け五つの角にぞ造りける。顔には朱を指し、身には丹を塗り、鉄輪を戴きて三つの足には松を燃やし、続松を拵へて両方に火を付けて口にくはへ、（略）、貴船の社の計らひにて、生きながら鬼となりぬ。宇治の橋姫とはこれなるべし。」屋代本『平家物語』「剣之巻」

（髪を五つに分け五本の角にし、顔には朱をさし体には丹を塗って全身を赤くし、鉄輪を逆さに頭に載せ、三本の脚には松明を燃やし、さらに両端を燃やした松明を口にくわえ、（略）、貴船大明

神の言ったとおり生きながら鬼になった。これが宇治の橋姫である。）

(9) 日本古典文学大系 謡曲集 下（三四九〜三五二頁）を参照

(10) 小鼓を中心とした単調な調子の囃子。ここでは神官の祝詞や呪文が始まることをあらわす。

(11) 出端（では）太鼓入りの登場楽でここでは鬼女の怨念をあらわす。

(12) 糺河原（ただすのかわら）は、加茂川と高野川の合流した三角地点あたり。

(13) 出深泥池（みどろがいけ、みぞろがいけ）は、京都市北区上賀茂深泥池町および狭間町にある池および湿地。深泥ヶ池とも記す。近世まで深泥池を「御菩薩池」と記すのが一般的な表記だったという。

(14) 市原野（いちはらの）京都市左京区中西部の一地区。樺原野とも書く。鞍馬寺参詣の鞍馬街道沿いにあり早くから開けた。小野小町終焉の地と伝えられる小野寺（補陀洛寺）もある。

(15) 形代（かたしろ）神霊が憑く依り代の一種で、人間の例を宿す場合は人形を用いる。「鉄輪」の舞台では侍烏帽子と鬘を男女の形代とし、さらに五色の幣（神道の祭祀に用いられる二本の紙垂れ）が立てられる。

(16) 五徳（ごとく）五徳は小規模な炉や囲炉裏、火鉢や七輪などに設置して鍋ややかん、土瓶や鉄瓶などの加熱容器あるいは焼き網を上に乗せるための器具である。金属製のものは鉄輪（かなわ）とも呼ばれる。呪咀では鉄輪を上下逆にして頭に載せ、三本の足に蠟燭を立てて火を灯す。

(17) 後妻打ち（うわなりうち）中世から江戸時代まであった風習

で、離縁した夫が後妻をむかえるとき、先妻は予告した上で後妻の家を襲うことが行われた。

(18)「葵上」については、以下の著者による論文を参照。

『能楽「葵上」と「野宮」における主人公の表現構造とその特長』
—六条御息所の心の中の「葛藤と癒し」の心理分析— 〃その一〃
齋藤澄子 茨城キリスト教大学紀要 第四一号 一〇五―一二〇
頁 二〇〇七年

『能楽「葵上」と「野宮」における主人公の表現構造とその特長』
—六条御息所の心の中の「葛藤と癒し」の心理分析— 〃その二〃
齋藤澄子 茨城キリスト教大学紀要 第四二号 一七八―一九六
頁 二〇〇八年

参考文献

- ・謡曲集 上、下 日本古典文学大系 岩波書店 一九六〇年、一九六三年
- ・歌論集 能楽論集 日本古典文学大系 岩波書店 一九六一年
- ・世阿弥 日本の名著第十卷 中央公論社 一九六九年
- ・謡曲集 上、下 新潮日本古典集成 新潮社 一九八三年、一九八八年
- ・岩波講座 能狂言 全7巻、別巻1 岩波書店 一九八七―一九九二年
- ・表章、加藤周一校注『世阿弥・禪竹』岩波書店 一九九五年
- ・謡曲集 1、2 新編日本古典文学全集 小学館 一九九七年、一九九八年
- ・謡曲百番 新 日本古典文学大系 岩波書店 一九九八年
- ・小西甚一 編訳『世阿弥能楽論集』たちばな出版 二〇〇四年

能楽「鉄輪」における「うらみ」の構造とメカニズム —主人公の心理分析を通してうらみと呪詛報復の因果を探る—

一五

- ・高安流大鼓 序ノ巻 安福春雄 能楽書林 二〇〇四年
- ・『観世流 舞の囃子』(復刻) 監修 金春惣右衛門 増田正造 財団法人日本伝統文化振興財団 二〇一〇年
- ・小能狂言事典 平凡社 二〇一一年
- ・『能楽囃子体系』(復刻) 監修 金春惣右衛門 増田正造 財団法人日本伝統文化振興財団 二〇一一年
- ・鉄輪 観世流謡本 観世左近 檜書店
- ・鉄輪 宝生流謡本 宝生九郎 わんや書店
- ・鉄輪 金春流謡本 金春信高 金春刊行会
- ・鉄輪 金剛流謡本 金剛 巖 檜書店
- ・鉄輪 喜多流謡本 喜多節世 喜多流刊行会

参考図書(年代順)

- ・小川国夫 「天の花 淵の声」 角川書店 一九七六年
- ・馬場あき子 「鬼の研究」 ちくま文庫 一九八八年
- ・観世栄夫編 「日本の名随 能」 作品社 一九九〇年
- ・渡辺保 「能のドラマツルギー」 友枝喜久夫仕舞百番日記」 角川書店 一九九五年
- ・杉本苑子 「能の女たち」 文藝春秋社 一九九九年
- ・観世清和 「一期初心」 淡交社 二〇〇〇年
- ・観世寿夫 「世阿弥を読む」 荻原達子編 平凡社 二〇〇一年
- ・梅原猛 「梅原猛の授業 能を観る」 朝日出版社 二〇一二年
- ・梅原猛 「能を読む」①④ 角川学芸出版 二〇一三年

参考論文(年代順)

- ・能謡名所「鉄輪」の女と安倍晴明 栗林貞一 観世三十三―十二

齋藤 澄子

- 一九六六年十二月
- ・謡曲「葵の上」をめぐって―後妻打ちの御振舞ひ付「鉄輪」〔三山〕 吉田きやう 芸文東海16 一九九〇年十二月
- ・特集・平家物語―生まれかわりつづける物語 物語が物語を生む―『平家物語』〔剣巻〕をめぐって 神野藤昭夫 国文学四十七 一十二 六八九 十二〜十八頁 二〇〇二年十月十日
- ・鉄輪説話をめぐる―考察―髪表現を手掛かりにして 蟬丸と逆髪 綿引香織 『平家物語』の転生と再生 二二三〜二五一頁 二〇〇三年三月三十一日
- ・能のなかの異界(II) 貴船―『鉄輪』 小松和彦 観世七十一―六 六二〜六七頁 二〇〇四年六月一日

能楽公演鑑賞

- ・鉄輪 平成二十三年六月二十一日 シテ 観世鍔之丞 国立能楽堂
- ・鉄輪 平成二十三年八月一日 早鼓之伝 薪能 シテ 観世清和 MOA美術館
- ・鉄輪 平成二十五年八月三十一日 早鼓之出 シテ 武田志房 観世能楽堂

写真撮影

- ・京都 清明神社 平成二十四年二月十一日撮影 齋藤澄子
- ・京都 貴船神社 平成二十五年七月二十八日撮影 齋藤澄子

(齋藤 澄子 看護学部看護学科教員)

Structures and Mechanisms of “Grudges” in the Noh Play *Kanawa*
 —Causes and effects of grudges and cursing revenge explored through main
 character psychoanalysis—

Sumiko Saito

Abstract

In human feelings, a “grudge” is an action of mind arising from personal relationships. Differing from joy, sorrow, and other feelings that easily become apparent in facial expressions or actions, it is a strong feeling that is concealed, but harbored in the mind without fading. These are “grudge” characteristics. Various forms and degrees of “grudge”, a strong stressor on the mind, can be found. The solutions to them are multifarious. Since ancient times, there has been no shortage of stories and plays in which such “grudges” are resolved. Struggle with grudges is a universal action of mind for humanity irrespective of time and culture. It is readily apparent that the ways to cope elicit sympathy. As concrete solutions, “satisfying a grudge”, which is a common wish and practical action, is a typical approach. In the world of Noh, *Kanawa* is at the top of the list of plays dealing with the theme. It is still performed today as a popular program.

This paper is intended to analyze the “grudge” structure, emphasizing the main character of *Kanawa*, and clarifying the “grudge” mechanism, tracing the process leads to getting rid of it. What becomes clear from the results of analysis is that the “grudge” in “*Kanawa*” is a deep-rooted and heavy one, but the solution is truly clear and straightforward. It induces people to experience a sense of sympathy or achievement despite its unrealistic and preposterous approach. Some universal feelings which bring back instinctive desires and wishes hidden deep inside of human psychology are the fundamental elements generating “grudges”. The key to getting rid of a grudge has been clarified by analyzing the “grudge” structure and tracing the process leading to the solution. The main character of *Kanawa*, in an insane state of mind, takes an extreme substitute action for revenge. However, we, the audience, can accept that without feeling discomfort or contradictions and even experience a sense of achievement. That might be the attractiveness of *Kanawa*, in which we can share universal conscious feelings as Japanese people beyond time and space.